

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと “風”

第二十七号 (二〇〇九年六月)

今日から四年目に入ります。それで、てんでバラバラがモットーの小紙ですが、新たな決意という訳ではありませんが、一度くらいは皆で寄せ書きのようなものを書いてみようということになりました。

四年目の風 打田昇三

この小誌も四年目と言われて空白の二年間を思い出した。平成十六年六月「ふるさとの文化を伝えて活性化させる」目的から「民話ルネサンス講座」の開講式があり茨城新聞に掲載された。何人が来賓も出席して挨拶したようだが、いつの間にか拠点となる店も人も消えてしまい、生き残りは白井さん、兼平さん、小林さんと瀕死状態の私：言つなれば半公共的な挑戦事業で開始されたのに「歴史と文化のまち」を指す石岡で手作りの文化活動が尻つぼみになるのは堪え難いことだと平成一八年六月に「ふるさとルネサンスの会報」(翌年度から「風」)を出したのがスタートになる。程なく伊藤さんが入ってくれた。

「ふるさと」風 “ ” は、ようやく皆さんに読んで頂けるようになったが反応して下さるのは他県、他市の方が多いと主催の白井さんが嘆く。僭越ながら寂しい「石岡」を元気にするのが目的であることを行政にも市民にも知って貰いたい。

三年間で菅原さん、松山さんの参加を得て会は充実したが空白の二年間が惜しい。「まちおこし」の来賓たちは今頃、何を起こしているのだろう。四年目に思う。「私も早く逃げればよかった」

地獄と至福 兼平ちえこ

文化、歴史を語り継がなければ、生活がなくなってしまうと危機を力説する脚本家の白井啓治先生のふるさとルネサンス塾が平成十六年六月に開講。画家であれ、俳優であれすべて作文が基本であり、作文力のない者には達成が難しい、ということでした。終了後平成十八年六月より、半ば強制的にふるさとルネサンスの会報に参加。私にとりましては、毎月の地獄の締切日。そして仕上後の会員の皆さんとの和気あいあいの会報作りは至福の時。これからも常陸国の中心として栄えた石岡の歴史を皆さんに稚拙ですがお伝えしながら、自分磨きをしていきたいと思えます。皆様のご愛読と厳しいご批評など、よろしくお願いいたします。

胃が痛くなるけれど… 小林幸枝

「あなたには演技表現のスケール感という才能があります。明日からいらっしやい」そう言われて、何がなんだか良く分からないまま白井先生の

所に通うようになりました。それで、手話を舞にして朗読と一緒に表現する「朗読舞」という新しい舞台表現を考案して頂き、プロの女優を自指し、劇団ことは座を三年前の十月に立ち上げました。劇団を作る四か月前の六月にふるさとルネサンス塾の打田さん、兼平さん達と会報を作ることにしました。一流の女優になるにはちゃんと自分のことを文章に書けなければいけないといわれ、毎月胃が痛くなる思いで必死に書いてきました。でも私の文を楽しみにしています、と言われたことが励みになって、一度も休まず書き続けて来られました。そのおかげで舞も上達???

拙い文ですが今後とも、ふるさとの朗読舞と共に宜しく応援お願いいたします。

湧いてくるおもいを… 伊東弓子

この会との出会いは朗読劇の会場だった。宵の灯りの中、藁葺屋根の下での舞台にはとても感動した。日頃からの願ひであった故郷の伝説や身近な生活の臭いを孫達に伝えることが出来たらというおもいに火がついた。すぐ仲間に入れてもらった。

おもいを文字に変えることがとても難しかった。ペンが動かない。幼い頃、作文綴りが上手だ、等と言われたことが邪魔をしているのかも知れない。組み立て、整理することがうまくいかない。動くことは苦にならないがじっくり取り掛かることから逃げてきた生活姿勢がまずかったのかな。

毎月毎月助言をいただいても、同じ所をどうどう巡りしている。しかし、苦ではない。ここに来るのが楽しい。そして三年が過ぎた。そういう中でも湧いてくるものは尽きないほどある。湧いて

くる感情をよりふくらませて四年目の出発としよう。私のライフワークになる作業なのだから頑張っている。

「風の会」四年目に向けて 菅原茂美

石岡に、こんな素晴らしい会があるとは知らなかった。入会して早や1年半。毎月書き続けたエッセイを小冊子に纏め、遙かなる旅路(1)(2)として発刊させていた。今から7万年前、アフリカを飛び出した僅か150人ほどの小集団血縁は近かったはず。全世界に拡散し、現在67億人になった。いわば全人類は親戚のようなもの。今後、祖先の歩んだ遙かなる旅路を辿り、更にその先に、我々の明るい未来を築いていきたい。

四年目に向けて

松山有里

今年の四月から参加させていただいております松山有里と申します。始めてすぐに四年目に入るといふことで、みなさんの努力の三年の結晶のうえにただただ乗っからせていただいているだけで大変恐縮しております。毎月文章を書くといふことがいかに大変なことか、ここ数カ月で身にしみました。が気分屋の私にとつては、自分自身の気持ちの記録として大切なものとなっております。あの時はあんなことを考えていたんだなあ…とか、そつえばそんなこともあつたな…とか。時間が経つてしまえばそこに確かにあつた感情なんてすくにごくかに消し飛んでしまいます。文章にして残しておくとその感情をもう一度味わうことができる。これはかなり贅沢なことです。続けることで何かにできればいいなあと思つていきます。

分別なんて言葉は 白井啓治

分別なんてものは、自分にとつて都合のよい社会的立場を守ろうとする、しみつたれた夢も希望もない者達のほざく言葉だ。

デカダンでアナキーな考えで言つのではない。

嫌いじゃあないがダダイズムでもない。

そつだ、敢えて言つならば「既成を突き破る力」がそつ言わせるのだ。

デカダンもアナキーも好きではないがしかし、分別よりは創造的であり芸術的だ。

分別なんてものは、生きるという知恵を無差別に、また見境なく排斥して、創造という上に成り立つている暮らしを殺すにしか役立っていない。

分別なんて莫迦野郎の口にする言葉だ。何も分かつちやいなくせに、何でも分かつたよつな顔をするのが分別というものの正体だ。

ふるさとは、分別という衣は要らない。明日に向かつて今を突き破ることだ。

(四年目に向けての自身への応援歌)

其々の四年目に向けて…、でした。

今後ともどうぞよろしく願ひいたします。

風に吹かれて(09・6)

白井啓治

『常世の国に風が吹いたら』

常世の国の女が微笑んだ』

脚本家の道を歩き始めるきっかけ、という文章を書くきっかけになったのは、小学三年生の頃に書いた詩を誉められた事であつた。以来、詩をズーツと書き続けている。

母親が俳句をやつていた事もあり、一行詩のよつな形式の詩も長く書き続け、文作の習作にもなつている。それで改めて思つたのであるが、脚本家の構成というのは作詩に共通しているといえる。

詩と小説とは明らかにその様式が違う。長いとか短いの問題ではない。構成という視点での話である。

脚本には演劇、映画、テレビ、ラジオといったジャンルがあるが、構成の視点は類似している。

勿論、映画と演劇では全く物語の組み立てや台詞の在り方が違う。しかし、構成の在り方というか視点は全く詩と等しいといえる。物語の発展、飛躍、そして省略の仕方はまさしく詩といつても過言ではない。

舞台のセリフは、それ自体が説明表現であるので理屈っぽかつたりする。それに対して、映画のセリフは説明を嫌う。しかし、それはクソ・リアリズムの世界か暗示的、象徴的な世界かの場の違いだけの問題である。

面白いのは、歌の作詞の世界には、映画・テレビの脚本家であつたり、目指していた人が大勢いる。その代表は川内康範氏であり、阿久悠氏ある。

風の会では、会員を募集しております。  
入会ご希望の方、編集事務局までご連絡ください。  
風の会編集事務局  
〒315・0001 石岡市石岡13979・2  
電話 0299・24・2063 (白井)

そんな事を思っていたら、この会報にも少し詩を発表してみようかという気持ちになった。最近の若い人たちはあまり詩を書いたりしないようであるが、詩の飛躍や発展は心の分析に非常に有効であると思うのだが、何故書かなくなってしまうのだろうか。

文章を書くこともそうであるが、詩を詠い書くというのは、自分が一番勝手に居られて、他人に直接迷惑をかけないものであるから、大いに文作をお勧めしたいのだが。

「僕は今」

僕は今

しっかりと死を創るために

一生懸命に生きています。

僕の生は

僕でなければできない死を求めて

あるのです。

僕は今

誰よりも美しい死を創りたいと思っています。

そうです。

壮絶に生きることに尽くして

バツタリと

美しく

芸術的に死を創りたいのです。

だから僕は

僕自身に哲学を問いかけて

自分一人で問答をしているのです。

これは言葉の遊びではありません。

今生きている僕の死を創るための

僕の生きている葛藤なのです。

がつなが ていくこと

ふたば目

松山有里

今年の春は豆類 絹さや、スナップエンドウ、グリーンピース、そらまめが大豊作で、豆だけ収穫するのに2時間もかかった。あんなにたくさん作付したのが間違いだったと今年は少なめにしたら今度は大！不作。絹さやなど採れ始めたときに黄色くなつて枯れていつてしまった。スナップやグリーンピースは昨年秋に芽がでたが、早春に枯れてしまつて論外だが、なんとかそらまめがまだかるうじて採れている。しかしそらまめも収穫まで大変だった。まだ小さい頃から大量のアブラムシが枝先にたかつて、毎日のように手にふりおとし、手のひらにこんもりとできたアブラムシの山を地面にたたきつけては踏みつぶすことを数週間繰り返してようやくの収穫。と思うと病気が入り始めている。

ちょうど豆類が食べられるころになつてくるといも穴で保存して寒い冬を越えたさつまいもがだんだんとだめになつてくる。イモ類が底をつきると「何食べようかなあ」とちよつと不安になつてくるところに豆登場！で、ちよつどいいサイクルなのに、今年は満足に食べられないので気がぬけた春だ。花のようやく咲き始めたじゃがいもを横目で見ながら「早く食べたいな」と思う毎日だ。

そらまめのアブラムシを毎日つぶしながら、こんなにしつこく毎日同じようにとりついているその執念たるや一体どこからくるのだらうかと思ふ。きいた話だが、みつばちなども自分個人の命を考えているのではなく、その種全体の生き残りしか

頭に組み込まれていないので、自分が敵に針を刺し、死んでまで全体を守るといふようなことをすると聞いた。それをきいたときに「あーうらやましいな」と思ったことを覚えている。自分が全体のなかの一人として満足する生き方。とにかく誰かが生き残つてくれればいいわけで、自分のことはとやかく言わない。自己実現なんてどうでもいい。「そういう役割ですか、ああわかりました。」と満足して受け入れる。子供もわんさか産んで、肝っ玉おっかあになり、そうこうするうちにいい感じに枯れて、八郷にたくさんいるようなおばあちゃんになり、「畑と相談しながら野菜をつくつてみなさい。」とか「生きることはよついでねえ。」と言つてみる。当たり前に毎日たんと生きること、それが実は一番大変で大切なことなのかもしれない。大量のアブラムシを殺しながら、こんなに毎日毎日殺されても殺されてもめげずに昨日とまったく同じように空豆にとりついている、その命の勢いに圧倒される。短期間でどんどん産まれるアブラムシをみてみると、すべての命の勢いとは、発生して以来常にこのようなテンションで延々と続いているのだなと感じる。たまに踏ん張りすぎて鬱的になつたりすることのある私はそれを見てうらやましいと思ひ、また勇氣ももらう。アブラムシは自分を卑下したり、もうだめだなんて思わない。命をつなぐことしか考えていないのだ。人も本来そのように生きてきた。後ろ向きになつている自分のなかには、まったく反対のベクトルで「爆発的に生きたい！」と願うパワーが秘められている。だから私は畑に立つているのだらう。

来年の春は、見るのがいやになるほどたん豆

が食べられるといいなあとの底から思う。本当にささやかな願いだなあ。

## クモの ようなもの 菅原茂美

国家を一つにまとめ上げる方法には、民族宗教を創造し、強い戒律規範で、国民を縛るやり方もあれば、王は『法』なりとした君主国家もあり、また民主的に、国会で『法』を定め、法治国家として、統率する方法もある。

さてその『法』と『法律』とは、厳密には異なるものであるが、難しいことは言わず、同義とみなし、話を進めていく。憲法も法律も政令も、そして国際条約も自治体の条例・規則も、皆一纏めにして『法』として、以下取り扱うこととする。

早速だが、人間の「血液型と性格」に関しては、今日まで、医学的に専門の研究が、なされてはいない。しかし、民間では、さまざまな説が流布し、まことしやかに、言い古された挿話がある。即ち、A型の人々は、3人寄ればまず法律を作る」と。

対照的にB型は、うるさい縛り事を嫌う。マイペースで、自由奔放に己の好きなように行動をする。A型は、視界が遮られる森林で進化した集団に多く、まず人を疑ってかかる。警戒心が強く、何事も几帳面。だから秩序維持のため「約束事」を、キチンと決める。ところが、海洋民族に多いB型は、遠くまで見通しが効くので、人を疑わない。楽道家が非常に多いといわれる。

一方、O型は、一攫千金夢見るタイプに多い。冒険心が非常に強い。その証拠に15,000年

前、アジアを抜け出し、北米に渡ったモンゴロイドは、今、その子孫の99%はO型である。更に中米地峡を乗り越え、一気に南米まで歩を進め、合わせてその後、ヨーロッパから新天地を求めて渡来した人々も、勝負師タイプの、O型が非常に多かったといわれている。もともと全世界でO型は圧倒的に多く、ABO式では、人間の血液型の基本はO型であり、そこから他の型が派生していったのではないかという学者もいる。

ところで、日本人の血液型比率は概略、A型が4割、O型が3割、B型が2割、AB型が1割といわれる。私はB型だが、そして、法を守る立場の役人の端くれであったが、なんと法律の、こむずかしさ・冷血性など、小賢しいところが嫌いで、ただひたすら法を忠実に守るだけの、無能役人にはななり下がりがりたくなかった。臨機応変に、時により、多少「法」の解釈を変えても、やむをえぬではないかと考えていた。

法は、一部業界の既得権確保のための存在であつてはならない。善良な一般市民が、不利益を蒙らないためのものでなければならぬと、強く信じて生きてきた。なんかしら法律とは、ある一部の業界の権利を擁護するための、ガードシステムのように見えて、しょうがない。

そもそも法律とは、一体だれのために、何を守るために存在するのか?。定められた法律が、本当に守られているのか?。権力者のゴリ押しで、歪められることはないのか?。いつもそんなことを感じていた。

ドイツの諺に、『法律とは、クモの巣のようなもの。ハエは捕らえられるが、カブトムシは突き破って通り抜ける』とある。こんなことは、わが国

の後進性の表れかと思いきや、外国にちゃんと諺まであるのだから、いずこの国も、みな同じなり」と、ホトホト得心した次第。

コソド口などは簡単に捕まるが、政財界の超大物など、メッタなことでは掴まらない。せいぜい秘書逮捕ぐらいで茶を濁される。いわゆる、トカゲのシッポ切りだ。

コンピューター付きのブルドーザーと言われた田中元首相。蔭では、いつも彼は、刑務所の塀の上をヒヨコヒヨコ歩いているが、決して塀の内側には落つこちない。必ず外側にヒラリと着地する」と言われていた。しかし最後の最後はロッキード事件。5億円の受託収賄罪で実刑判決を受け、最高裁上告中に死亡。しかし札幌から鹿児島までの基幹新幹線ができる前に、『背骨より肋骨が先だ』とした新潟新幹線着工は、一体、世の中どうなつてんの? としみじみ考えさせられた。

同じく金丸副総裁。佐川急便から5億円の献金を受け、併せて巨額脱税事件で逮捕起訴・公判中に死亡。しかし、夢の超特急リニアモーターカーの実験線導入は、次世代交通の枢要をなすものらしい。両者あまりにも、似ていませんか?。さて、日本の3大ザル法ってご存知?

売春防止法 政治資金規程法 建築基準法だぞうだ。言われてみれば、ナルホド。

『売春は、世界で最も古い職業』といわれる。古代ローマやギリシャでは売春宿は、最大の税収源であつたという。古代インドの寺院は、売春宿を併用し、資金源にしたという。日本では、豊臣秀吉により「公娼制」がとられ、江戸幕府は、これを継承した。明治政府は1872年、「娼婦解放令」を発布したが、「従軍慰安婦」が求められるこ

とにより、有名無実となった。第2次大戦後は、GHQにより、1946年、公娼制は廃止されたが、根絶することはなかった。逆に米軍の慰安も兼ね、地図に「赤線」を引いて、公認区域が設けられた。そして、1956年「売春防止法」が制定され、58年（昭和33年）から実質廃止となった。アメリカと日本は、世界でも数少ない買春禁止の国である（アメリカのネバダ州は禁止していない）。

現在世界的には、売春を犯罪とするのではなく、売春婦を搾取する者を規制する方向になっている。ところで、58年当時、私は大学生であったが、規制前に経験しておけ……とかなり誘われた。しかし、お金もなかったし、カタブツで、先輩達に、からかわれていた感もあったが、ついに洗礼を受けることはなかった。

さて、規制後の本法施行状況であるが、社会の緩衝材として「必要悪」などと言われるが、正にザル法もいところ。どんな不況があるとも、この業界だけはいつも元氣。他人の人権を踏みこじって、利を稼ぐ不逞の輩がウヨウヨだ。

次は政治資金規制法だが、先生といわれる、お偉い方々が、陰では何をしていることやら……。あの手この手で、政治資金を集めまくらなければ、政治活動ができないというのか？

話は飛躍するが、国の台所が「超火の車」だといふのなら、教育や福祉の予算を削る前に、なぜ国会議員の報酬を切り下げないのか？ 議員の数を減らさないのか？ そして二院を一つにできないのか？ 天下一先への巨額な国の委託費を、なぜ切断できないのか？ 国会は審議拒否などで、空転の連続。開店休業がしばしばだ。国費のこん

な無駄遣いが、なぜ許される？ 政党収入の大部分は税金だ。高禄を食みながら、なんたる体たらく。国自身が、夕張市どころか、超財政破綻の組織という自覚はないのか？ だれが責任を負うのか？ だれがどうやって、膨大なこの借金（\*）を返すのか？……

いい歳をして、単細胞丸出しと言われるかもしれないが、いつも疑問に思う。

【\*日本の財務省は、08年度末現在、国債や借入金を含めた「国の借金」（債務残高）は、846兆4,970億円と発表。国民一人当たりの借金は、約663万円となる。】

そして建築基準法も大ザルだという。人間が生きていく上で最も重要な「衣食住」の一角を担う建築物が、耐震強度不足とか、諸々手抜き工事ときては、たまつたもんじゃない。マンションなど高い買い物をして、大きな地震があつたら崩壊の恐れがあるなど、論外の話だ。まして幼い子供達の学校が、強度不足とは何事か？ 公共の施設など厳重な検査が行われてしかるべきであろう。

国家試験による一級建築士ともあろう者が、拜金主義で、悪魔に魂を売ったか？ 人命をなんと心得る？ そんな建築士は、大きなクモの巣にも引つ掛かつて、30年ぐらい、身柄を拘束されたいらいい。それほどに「公」が認められた資格者といふものは、責任が重いということだ。

以上3大ザル法の悪口を長々述べたが、いくらザルでも決して改正もされず、廃止もされず、延々と生き延びているのだから不思議である。

そもそも、「法律」とは一体何ものだ？ 誰かのご都合主義で、ろくに検討も加えられず、その場しのぎに作られたものが多いのではないか。どれ

だけ頭がいいか知れないが、一流大学の法科出身者が、ろくに社会の現実を、知りもしないで、一部業界に泣きつかれ、法律の原案を国会に提出する。すると我々国民が選んだ議員達が、官僚に丸め込まれ、そつだ！そつだ！と賛成し、業界保護の浅ましきものが、世に堂々と誕生する。

3権分立で、「司法」が違憲立法の審査はするが、誰かが利益を独占するということは、誰かがその利益をうけ損なうということだ。国家百年の計など、一体どこにあるというのか？……

さて、食糧自給率40%ということは、輸出国との仲違いや、世界的大旱魃や、火山噴火などで長期冷害が続けば、食糧輸入は断絶し国民の6割が腹をへらし、死ぬということだ。歴史上最大のパンデミックであつた1918年のスペイン風邪でも、全世界の死亡者は4,000万人。2%であつた。（今回の新型インフルエンザの死亡率は、今のところ、感染者の0.4%。毒性は弱いというが、基礎疾病のある方は危険である。震災・酷暑等と重なつたら、一大事。）

車を輸出すれば、食糧はいくらでも買える……と、うそぶいた大物政治家や官僚がいた。いざとなれば、ゴルフ場に、サツマイモでも作ればよいと考えているのだろうか。あまりにも思慮が足りない。現在日本の遊休農地面積は、全耕地面積の8.4%に当たる39万ヘクタールである。良識の政治家など、どこにも存在しない。農地は荒れ放題。生活が成り立たないから後継者がいない。（この点、風の会」に新加入された松山さんが、大都会からお見えになって、農業を始められたということは、真にご立派。心から拍手を送りたい。）

更に、一部個人負担はあるが、莫大な税金を使

つて、耕地整理をし、立派な水田を造成しても、これを休耕すれば国から助成金が下りる。こんな法制度が、何のために決められたか？ 世界情勢が読み切れずに、何が政治だ？

人を非難するということは、ブーメランのようにそのまま自分に返るとのこと。私が幼い頃、祖父は『天に唾すれば必ず自分の顔に戻る』と言っていた。しかし、弱者を切り捨て、強者を保護するような法制度だけは、絶対に許せない。

私が中米に滞在した頃、バナナ・パイナップル栽培農家を、アメリカ資本が、根こそぎ搾取する現場を、しっかり見てきた。自由経済というが、誰かが自由であることは、誰かが不自由に泣かされているということ。『法』は万民に平等でなければ、むしろ、無い方がましだ。

(お隣の將軍様は、国民を300万人も餓死させた上に、逆らう者は、国家反逆罪で、これまでに3万人も処刑したというが、私もあまり、お上に文句を言わない方が、利口かな……。)

以上3権の「立法・行政」について、さんざん悪口をたたいたが、残りの「司法」についても、多少文句はある。それは、あまりにも起訴から判決まで、時間がかかり過ぎること。それに、日頃なげ、犯罪の被害者救済は放ったらかしなのに、まず加害者の保護に特別配慮をするのか？ 国民の税金で、なぜ国選弁護人をつけ、公判を維持するのか？ 冤罪の例もあれば、被告人から依頼を受けても弁護を拒否する例もあるかもしれない。公平な裁判をする為にも、国選弁護人も、必要なのかもしれないが、人を殺めた者は、死をもつて己の罪を償うほかないと思うが、それでは、あまりにも短絡すぎると思うのか？

そこで、国民の声を司法に反映させるための裁判員制度が、いよいよ発足だ(09年5月21日から)。裁判官・検察官・弁護士という裁判のプロだけではなく、一般市民も参加する。この制度は、日本を除く先進8か国(G8)すべてで、既に採用されているという。市民の負担が重いという意見もあるが、それでも立法・行政と同様、民意を反映させる必要があるということらしい。しかし、かなり気の重い制度導入ではある。

さて、直立2足歩行を始めて、人類は700万年の歴史を持つ。野生時代の長い長い原始時代を経て、今から400万年前、原人は意図して「火」を用いるようになった。そのため栄養が改善され、大脳を急速に発達させ、道具が改良されて、人類繁栄の基礎ができた。

そして今から十六万年前、アフリカで、原人から、我々新人「ホモ・サピエンス」が生まれる。その一部(ほぼ150人)が、七万年前、生まれ故郷アフリカを後にして、アフリカ半島へと渡り、全世界へと飛び立っていく(一部は再びアフリカへ逆戻り)。故に、現在の全人類67億人は、非常に血縁も近く、人種によるDNAの差は、わずかに、0.02%以下である。そんな血縁同士なのに、なんでこんなにも、世界各地で「いがみ合いやケンカ」が絶えないのか？

そこで世界は、やっと眼がさめ、色々な国連機関を立ち上げた。数ある中で、WHO(世界保健機関)の活躍は、目を見張るものがある。何より大事なことは、まず全世界の人の命を守ることだ。新型インフルエンザで、警戒レベルを、世界大流行の直前のフェーズ5と設定し、全世界に警戒警報を発している。先進国の死亡率はそれほどではな

いにしろ、冬季を迎える発展途上国では大変な事態が予想される。更に強毒化変異が怖い。故に地球全体が一族ぐらいの心構えで、事に当たる必要がある。勿論病原体を、テロリストに悪用されるようなことがあってはならない。

更に、地球規模で取りかかるべきことは、先のアメリカ発の金融危機。いかに自由経済が大事とはいえ、金融市場を放任した罪は重い。米政府・FRBも絡み、米国の利益追求を狙ったが、超金余り現象を招き、見事にバブルは崩壊。全世界に恐慌を引き起こし、国際秩序をかき乱す。こんなことは、国連の機関が十分に目を光らし、厳しく介入し、コントロールすべきである。先の石油や穀物価格のつり上げなど、舞台裏で暗躍する連中が許せない。人を殺すのは伝染病だけではない。失業など経済が理由で、多くの人が自殺をしている。国連は「もっと丈夫なクモの巣」を、しっかりと作り直してほしい。それくらいは、21世紀を迎えた人類の、当然の『智慧』と言えよう。

## Coffee & Tea Room

### 《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦

蕎麦会席料理のお店です

(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00

16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 - 43 - 6888

歴史方イ に行行して(11・3) 兼平ちえこ

今年で16回目の石岡ふれあいウォークラリー大会(石岡市中央図書館前イベント広場からスタート)が、5月24日(日)に行われました。天気予報も少し外れ、小雨の降ったり止んだりの中、予報のせいでしょうか、例年より参加者が少ないように感じました。

旧石岡市内を歴史コースと健康コースに分かれ2時間かけてのラリーです。寺社巡りが中心で、歴史コースはその時の寺社のご朱印を頂ける事も魅力の一つです。

三代の家族連れ、中学生同志、中高年のご婦人同志、「小さな手の台掌姿」石岡って寺社が多いんですね、楽しみと健康を得ながら、先祖さま、そして先人達への感謝の気持ちもお伝えしながら、石岡の歴史を肌で感じられる大会です。どうぞ来年こそご参加をお待ちしています。賞品もどっさりです。

さて今回の「霞ヶ浦・常陸国風土記を歩く」会の皆さんへのご案内は、4月、5月より続いています。常陸国分増寺跡内の最終となります。中門跡の仁王門、都都逸坊扇歌堂についてご紹介しましょう。

#### ・中門跡の仁王門

天平十二年(七四二)、聖武天皇の勅願によって建立された全国六十六ヶ所の国分寺の中で常陸国分寺は、八世紀後半には建立されたと推定されています。建立以来百年間位は、すこぶる盛大であったそうですが、天平の国分寺は律令制度の衰退に伴い、国府の力の喪失や、加えるに天慶二年(九

三九)、平将門の乱によって国府が焼かれ、鎌倉時代には廢墟と化してしまいました。その後一三四六年大掾詮国が国府跡に府中城を築いて本拠としました。当時は、常陸太田に佐竹氏、水戸に江戸氏、石岡に大掾氏と群雄が割拠していました。こうして中世の府中に君臨してきた大掾氏は天正十八年(一五九〇)に佐竹義宣の府中城攻略によって滅ぼされ府中の町は廢墟に帰し、中世の文化と国分寺は消えていった。

常陸国分寺時代の中門跡には元龜元年(一五七〇)起工、天正二年(一五七四)完成、宝曆(一七五一〜一七六三)年間に修理されました。「仁王門」がありました。しかし、明治四十一年(一九〇八)四月二十二日の町内大火で焼失してしまい礎石と敷石を残すのみであった。この「仁王門」には有名な名工春日作の金剛力士像があつたが、仁王の頭部と手、足を搬出したのみでした。

国分寺は幾度か火災にあいながら、復興の道を繰り返してきましたが明治四十一年の大火以後は仁王門の再興の動きはなく、ただ石畳と仁王像の一部が残るだけだった。

#### ・仁王門伝説

それは四百年以上も昔の出来事だった。

「コマ売りの佐助が夜更けになると、国分寺の仁王門で何かやってるぞ」といううわさが府中の商人の間で広がっていった。秋田から来た佐助は薬師堂の門前で商いをするまじめな青年であつた。カツと目を見開いた呵咩一対の仁王様は身のおよそ六メートル。この仁王門のどこかに、かつて常陸国を治めていた大掾氏の秘宝のありかが、梵字で記されているという。しかし、それを知っているのは、すでに滅ぼされた大掾氏と薬師堂の

和尚だけだった。

ある夜、この秘宝を知ってか知らずか、この梵字を写していたコマ売りの佐助は和尚に見つかり「あつ!」と声をあげて逃げていった。その後、佐助の姿を見た者は誰もいない。

如何でしょうか、大掾氏の秘宝のありかと佐助の行方も気になるところでございますね。

戦乱の世に、門前には野菜、魚、雑貨などを売る朝市の風景、なぜかほつとする人々の生活も伺うことが出来ました。

#### ・都々一坊扇歌堂

市指定有形文化財(建造物)、昭和五十三年九月十一日指定。

民衆の文芸詩、心の唄である都々逸の創始者、初代都々一坊扇歌の霊を祀り永く顕彰するため昭和六年市内の有志が建立期成会を結成し、全国の芸能人及び都々逸愛好者、俚謡作家より浄財を集め昭和八年四月八日完成、盛大に入仏式が行われた。堂内には当時笠間市在住の横山一雅氏の刻まれた都々一坊扇歌の木像が安置されています。

都々一坊扇歌は文化元年(一八〇四)、医師の岡玄作の二男として常陸太田市磯辺に生まれ、幼名子之松(ねのまつ)のちに福次郎と改めました。

六歳の時、痘瘡にかかり失明同然となりましたが、幼少から音曲が好きで十四歳の時、養子先から飛び出し、五、六年間唄行脚の放浪生活を続けました。やがて古三味線を抱えて、故郷に戻り、叔父の医者の子の居候となつたが、日本一の芸人になるつという決意固く、「數医者の子が」と叔父に反対されたが、

親が藪なら 私も藪よ

藪につぐいす 啼くわいな

と返歌して、二十歳の時、江戸に出て船遊亭扇橋の弟子となり、その後寄席芸人として修行が続き天保九年（一八三八）一枚看板を許され、当時流行していた「よしこの節」「いたこ節」などを工夫して新しく都々逸節を作り、都々一坊扇歌と名のりました。

たと売れても 売れない日でも

同じ機嫌の 風車

扇歌は高座にあたって聴衆からの謎掛けを即座に解いてしまつ頭の回転の速さが江戸庶民の評判になりました。しかし、当時の政治や社会を批判した一句、

上は金 下は杭なし 吾妻橋

で、江戸追放の身となつてしまいました。

江戸を追放された扇歌は姉の嫁ぎ先、府中香丸町の酒井長五郎さん宅に身を寄せ、一世を風靡した扇歌も病に勝てず、一八五二年四十八歳で生涯を閉じました。辞世の歌、

今日の旅 花か紅葉か 知らないけれど

風に吹かれて 行くわいな

法名・都々一坊賢叟清信士。

扇歌のお墓は、現在の国分寺本堂の裏側にあります。尚、都々逸作詞については俚謡として目にする事が出来ませんが、都々逸節としてはあまり馴染みが感じられないのは私だけかもしれません。是非愛好者の方々の公演を望んでおります。以上で国分増寺跡内のご案内は終了しました。来月は国分尼寺跡、鹿の子C遺跡のご案内したいと思います。

常陸国分寺の由来

常陸国分寺たまげた伝説

四苦八苦しつてこの 文も書きなれど

終わればホッと 笑みの一息を

ちえい

気で な仲間達

小林幸枝

ゴルフデンウイクが終わって間もなく、ふるさと風の会、ことば座、ふるさと文化市の関係者16名が集まり、親睦ボーリング大会を行った。男性の平均年齢が65歳、でも平均年齢を一生懸命引き下げているいしおか補聴器の阿部さん、オカリナの野口さん、ふたば自給農園の佐藤さんを外すと、実に平均年齢70歳、でもこの男性陣の元気な事には驚かされました。

皆、ボーリングは何十年振りといいながら、昔は相当に不良青年であつたらしく、上手いのは驚かされました。風の会の菅原さんは、オープンフレームなしのプレーをされビックリでした。

昨年、ふたば自給農園での収穫祭以来、楽しい事で、もつと集まりましたよという話が出ていたのですが、なかなかこれをやるよというものが見つからず、話だけで終わっていたのですが、石岡に新しいボーリング場が出来たの知っています？ の話から、急に話がまとまり、初めての親睦会が行われたのでした。

この日初めて顔を合わす人もいましたが、皆和気あいあい楽しく普段のストレスを発散しました。

ボーリングの言いだしつべが阿部さんと私だったので、幹事をさせられました。この遊びの親睦会の幹事は阿部さんと私に決まりそう。6月公演が終わったら、今度はバーベキュー会をやるよということになっています。

私の両親も、健聴者の人たちとこんなに気楽にお付き合いをする事が普段ないので、とても大喜びでした。元気で愉快な仲間達と、過ごせる時ほど素晴らしい幸せな時はありません。

ふるさとを真面目に考え、一生懸命な活動と共に、愉快に楽しく過ごせることを幸せに思います。ことば座の公演も、風の会の会報も、ふるさと文化市も一生懸命に楽しく長く続けていけたらいいなと思います。

こだわりは大事にしたい

伊東弓子

故郷にはこの地を表した言葉として、「六井六畑八館八艘」がある。霞ヶ浦と台地の豊かな自然環境に包まれ、人々が歴史を紡いできたことを表す、大切な言葉だと思つた。

この地で育ちながら、この言葉を再認識したのは六十歳になるうとしていた時、地域の歴史を探访する講座に入つたことからであった。この講座によって、歴史の中に今の自分の存在もあつたことに気付かされたのであった。

みんなで「六井六畑八館八艘」といわれる所を歩いた。大半の場所が雑草に覆われ見つけるのに容易でなかったり、立札が倒れていたりという状況だった。

農村の働き手が他産業へ移っていく中で、手作業から機械化へと進んでいった。山地や小さな田畑には手が回らず荒れていき忘れられていった。地元の人でさえ「六井」の名を口にする事がなくなっていた状況だったのだ。

受講した人達から「ここは自分たちの故郷なのだからきれいにしよう」という声が上がリ、地域の有志達で「史跡と自然を護る会」を発足させた。

活動は先ず取り掛かりやすい「六井」からということになった。其々の井戸の持ち主を訪ね、会の趣旨を話し、協力をお願いした。農業現役の年配者の指導で井戸浚い、周囲の草刈り、雑草取りをし、きれいにした。そうした中、故郷の歴史についての話など、知っていることの情報交換などを行い、楽しく勉強していった。

「六井」は、隣町の石岡にも「府中六井」と呼ばれており、県西の方にもあると聞いた。時期を同じくして名が付いたのかどうかは解からないが水の大切であった時代には特別視された場所があったのだから、「六」という共通点は面白い。

子供の頃には山間の清水、田の一部から湧き出る水をそこで見た。高浜、高崎、大井戸、川中子と霞ヶ浦に面しているところでは屋敷内に屈んで掬って使う井戸があった。魚が泳いでいて掴んだりした楽しい思い出もあるが、この近辺でも水争いは絶えることなく、死活問題の騒動も起きていたようだ。

玉里の六井は、下玉里地区に高井、八井、谷井、帯合井（帯阿井、帯谷井）があり時代によって帯合井でなく同じ地域の洪井と記されている。高崎地区には亀井がある。そして上玉里地区涌井、玉井（玉乃井、玉の井）がある。

それぞれの井は、昭和三十年代頃までは使われてきたが、四十年代に入ると水は涸れていったという。原因はわからないが同時代に山が荒れ、木々は伐られ、住宅が増え、道はコンクリート化されていったことは何らかの係わりがあるだろうと思っている。現在三か所は全く水はなく、あとの三か所は僅かにしみている状態だ。

「井」の整備・清掃をしている時は何の問題もなかったのであったが、資料や葉作りになって、名称をどう書くかで問題が出てきた。それは活動の時集合場所としている所、玉井（玉乃井、玉の井）の呼び方に始まったのだ。

この「井」は、田余の地名に由来する倭武命の伝説をもつ「井」と言われているが、本当の玉井（玉乃井、玉の井）は、社の森の北側にある御手洗（おみたらし）のことだという人も多い。確たる文献があるわけでもなく、どちらがどう、ということとはできない。しかし、言い伝えを後世、次代に伝えていくためには、総てのものをそっくり渡していくことが重要である。そうした話し合いを随分持った。そして、玉井（玉の井）と記すことと確認が出来たのであった。

ところが、そう確認したにもかかわらず、年月の経過に伴ってあやふやになってしまったのだ。そして、ある時それが問題として大きく吹き出してしまったのだ。

それは、ある総会の夜のことであった。熱心であった一人の人が欠席であったので、その日の資料を渡して寄ったのであった。

その日の資料に記載されていた「玉井」には、（ ）書きにされた玉の井はなかった。それで私は、それを書き足しておいたのであったが、それ

## 補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

石岡市石岡 2 1 5 8 6  
電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

を見てその人は、

「始めから書かれたものじゃないな。お前が書き入れたんだな。どうせ俺の言ったことは無視されたんだ。もういい。俺は、この事に関しては卒業だ。これだけの資料がある。これをお前を含めて皆がどう見ていくか、渡す」

と紙袋を一つ投げるかのようにして渡してきた。私は、資料の重みと彼の心の重みを受け取った。資料と共に「井」の名称を捨てたかのようにその後一切口にしなかった。私の力の無さも反省しながら改めて資料を広げてみた。

新編常陸国誌 卷三(玉ノ井ト云イ)

口訳常陸国風土記(玉之井)

玉里村史(玉の井とあり)

玉里の史跡 六井六畑八館八艘 探報マップ

(玉井 たまい たまのい)

広報たまり 水と緑とふれあいの里 玉里村の観光学MAP(玉乃井跡)

玉里村文化財ガイド「玉井(たまい)玉乃井跡」  
たまり 玉里村合併40周年記念要覧「玉井(たまい)・玉乃井跡(たまのいあと)」

21Century 新世紀まちづくり「人と自然が交換する玉里 快適田園文化のまち」(玉井 Tamanoi 玉井跡 Tamanoi historic site 玉井 たまのい)

美野里町玉里村八郷町石岡第3号合併協議会、たより(玉井・たまい)(玉乃井の跡)

美野里町玉里村八郷町石岡第5号合併協議会、たより(おわびと訂正・誤「玉井たまい」「正」玉井たまのい)

茨城県風土記新治郡玉里村(玉乃井跡)

新しい玉里村の歴史(玉ノ井・玉之井の説明)  
日本地名大辞典181

その人の集めた資料は古いものもあるが、この二十年ちかくのものが多く、その都度資料の中の名称の使い方はさまざまだ。「玉井」と書いて「たまい」「たまのい」とよぶ場合、又「玉乃井」「玉ノ井」と書く時もある。記載した人達はどこから引用しどんなおもいをこめてしめたのだろう。この一つ一つを見た人はどういう受けとめをしているだろう。

よび方として「たまい」「たまのい」といつてきているから書く時も双方をかきいれておくべきだということになる。こんなにこだわる人がいる事を粗末に出来ないと思った。

今後私達は、次の世代に手渡していくか、もっとよく考え、丁寧に扱っていききたいものだ。近辺でも六号パイパスと古墳群の事、サッカー場つくりと自然破壊についてもこだわる人がいる。声を出して訴えている人がいる。押し流されがちだけれど耳を傾げる人もいる。そこに考える力が貯えられ、何らかの行動に繋がって欲しいと願う。私もそうしたい。

大の 打田昇三

日本では二月十一日が「建国記念の日」に指定されている。これは紀元前六六〇辛酉(かのととり)年の元日に豊御毛沼命(とよみけぬのみこと)が畝傍(うねび)山麓の檀原(かしわら)で即位

して神武天皇を名乗った。当時の元日を太陽暦に直すと二月十一日になる。という実は大雑把で何の根拠にもならない建国記念理由である。

現在の日本史観では九州から東進してきた大陸系民族が近畿地方に入り込んで新規開拓したのが崇神王朝、応神王朝、継体天皇：いずれにしても神武天皇は実在の可否が問われている。強いて神武天皇を実在させても年代的には何百年も後の時代になる。というのが一般的な論であると思つ。

細かい話になるが「古事記」「日本書紀」では近畿地方に入り込んだ神武天皇になる人物は熊野の山で土地の荒神の毒に倒され、部下の兵士全員と共に意識不明の重態に陥った。この際に敵軍は全員を殺害した筈である。医療が発達した現代に置き換えても、集団が意識不明になった病状から、一瞬にして全員が治り戦争に勝つのはおかしい。「眠らされた」説もあるが、碌な医薬も無かった時代に優れた麻酔薬があったとは思えない。

ここで登場するのが鹿島神宮の祭神・武甕槌命(たけみかづちのみこと)、石上(いそのかみ)神宮に祀られた布都御魂(ふつのみたま)、賀茂神社に鎮座する玉依姫命などの神様と、その祭祀に関わっていた古代の民族である。つまり一足早く大陸から来ていた出雲系の人たちである。武甕槌命は、神武天皇の上司・天照大神と知り合ひでありメール友達でもあったから、頼まれて危機に瀕した神武天皇御一行を救援しに向かおうとする。

しかし出かける前に、「既に全員が意識不明」と聞いたので、「これは行っても無駄」と判断した。そこで多数の棺(ひつぎ)を手配し、他の神様たちと相談して急死した神武天皇の身代わりを探し開拓事業継続のために新たな集団を組織した。

戦前の歴史を信じる方からは「デタラメを言うな！」とお叱りを受けると思うが、神話でも武甕槌命は天照大神から懇願されたのに自分では腰を上げることなく、代わりに武力の象徴である「剣」を無名の家臣に現場へ届けさせただけである。

誰が身代わりになったかは何千年来の国家機密の筈だから詮索はしないが、名前から推測すると武甕槌命の娘か孫と思われる比売多多良伊須気余理比売（ひめたたらいすけよりひめ）が初代皇后になっており、賀茂社の祭神が初代皇后の出生にまつわる神話に関わっているので、豪族たちが相談して「初代首長」を選んだことは推定できる。

王権とか王者の地位などは連綿と一つの系統で続くことが難しい。これは日本も異国も同じであるが日本の場合には先住民の縄文人が平和に暮らしていたところへ、大陸から来た弥生人が侵入してきて支配する。その時代が何時ごろなのか記録が無いからいろいろな歴史観が生まれる。

昭和二十年までは、神様の威光を権力に結び付けた明治維新の歴史観が国民に強制されていた。それが誤りだったことは皆が知っている。戦後は誰でも自由に「自分の国の歴史」を考えることが出来るから「日本人」を探究する幅が広がったのである。そういう意見に対して「これは嘘だ！」などとは誰も言えない。私が存じあげた範囲でも、逆賊とされた蘇我氏・弓削氏の天皇説や九州王朝による支配説、騎馬民族による征服説などがあり私は全部を受け入れて参考にしていく。

個人的な意見を言わせて貰えば、伊勢神宮の神威（伊勢氏の武力）を背景にして現在に続く天皇制が確立されたのは「大化の改新」の後「壬申の乱」で大友皇子こと弘文天皇から政権を奪った

天武天皇からではないか？と思っている。この系統は称徳女帝までで、天智天皇系に戻された。

日本では権力を奪い合っても「万世一系」に拘るから嘘と無理が目立つ。その点、異国の歴史は権力が変われば過去のもの捨てられるから実にサッパリしたものである。しかし、見捨てられた王朝でも記録が石に刻まれていれば後世に権力者の名前だけは残る。序章で紹介したアッシリア帝国などは初代から続く百七人の王の名が明らかにされているが、初めの四十人ぐらいいと、最後が少し怪しいと思われるらしい。

日本の場合と良く似てはいるが向こうのは何千年も昔の石彫りだから嘘でも本当らしく思える。紙、竹、布、木などに記録された日本は焼けたら終りであるし簡単に書き換えられる恐れもある。その上に日本の古代に文字は無く、年齢のせいで半分は忘れ勝ちな古老の伝承に頼っているだけなので、真実がどこにあるのか皆自分からない。

前置きが長くなっただけでも「吉の章」ではペルシアに興ったアケメネス王朝と、ギリシアの辺境に現れたマケドニア王国（ギリシア本国を合わせて）それに乾燥地帯で暴れ回る遊牧騎馬民族のマツサゲタイ王国について触れた。まずはペルシア帝国第二代目の王となったカンビュセス二世が父親（キュロス大王）の仇であるマツサゲタイを放つて置いてなぜ唐突にエジプトを攻めたのか？を説明しなければならぬのだが：

話の成り行きからエジプト王朝の事情を述べたおく必要がある。当時の国際社会は隔絶された日本などを除き相互に深い関連を持っていたから重複する部分もあることをお断りして、エジプトの概況と共に最初にエジプトを攻めたアッシリア帝

国のことも少し付け加えておきたい。

日本で紀元節の根拠とした神武天皇即位の時代（紀元前六六〇年）は、新バビロニア王国やペルシア帝国などが滅亡へと追い込んだアッシリア帝国の全盛時代と同じ頃である。大英博物館に展示されている「アッシリア彫刻」とよばれる多数のレリーフ（浮彫り彫刻）は、残虐な軍隊を誇示して世界帝国を築いたアッシリアの首都ニネヴェの遺跡（イラクの北部・チグリス河沿いの都市モースル）から大英帝国が持ち出したものであるが、その中でも特に全盛期の王アッシュルバニパルの活躍？を示したレリーフが多いようである。

この王は本格的な図書館を設立したことも知られている。文字も無かった日本とは格段の差で残虐な王のイメージと違う面もあるが、国力増大のためには恐ろしいこともしたのであろう。アッシリアにもライオンが生息していて王様の大切な仕事「ライオン狩り」でトドメを刺すこと「なのだ」とか、猫とは違うから命がけの任務であった。

アッシリア彫刻の中に「王宮庭園での饗宴」と題された一枚があり、寝台のようなソファに王妃と寛ぐアッシュルバニパル王と料理を運ぶ女官たちや側近の姿などが彫られている。場所が庭園であるから周りに樹木が有るのは当然だが、一本の木にぶら下がる奇妙なものは北部で抵抗していた小国の王の首だとか：実際に生首をぶら下げて宴会を開いたのかどうかは不明だが、アッシリア帝国の力を誇示してはいる。

本来、アッシリア帝国は交易により繁栄してきた国である。その通商路はエジプトにも通じていて両国が同盟を結んでいたこともある。そのエジプトが国力の衰えから乱れてきたのでアッシリア

が親切に？攻め込んで占領をしたのである。

エジプト王朝に衰退の影が見え始めたのは言の章で述べた、海の民の侵略を阻止した後である。しつこく侵入を繰り返す海の民を撃退するために膨大な予算を注ぎ込んで軍備を強化し、兵力を失い第二十王朝は国力を弱めてしまった。さらに肝心の王様が強敵を追い払った後に平和呆けて国内が乱れ国王暗殺未遂事件まで起こっている。

第二十一王朝は「どこの馬の骨」とも分からない人物が第二十王朝を無視して勝手にこしらえた王朝である。それでも七人の王様が居たという。

現在はエジプトの西の国はリビア、南の国はスーダンである。スーダンの東隣にはエチオピアがある。それらの国々はエジプト王国が強大だった頃に属国にされており、住民たちは貢物を献上させられ、労役に駆り出され、兵力を提供させられるなどの支配下に置かれていた。

属国のうちで、先ずエジプトに反抗したのはナイル河下流のデルタ地帯西側に居たリビア人である。リビア人は長年に亘りエジプトに抑圧されながら時に反抗していた。襲来した海の民にも一部のリビア人が混じっていたようである。後には降伏してエジプト軍の傭兵になったらしくデルタ地帯を守備してきたのだが、自分たちのほうが強くなっていたので立場を換えることにした。

一方、ナイル河上流地域のスーダンからエチオピアにかけてエジプトに占領されながらも部族制社会を保っていたのがヌビア国である。ここにはエジプトから派遣された総督がいた。この総督が当時の第二十王朝を牛耳るテーベ神官団と大喧嘩をして本国との間が疎遠になった。

テーベとは現在のルクソールである。首都の力

イロから約七〇〇kmほど上流の河畔にあり、ルクソール神殿、カルナック神殿、王家の谷など観光名所で知られている。四千年以上前から神殿の威光に支えられてエジプト王国の首都であった。

ヌビア国では、自分たちの監視役である総督が本国政府の実力者から見放されたのを知ると部族の長老たちが相談して「クシュ」と言う王国を創設しエジプトからの独立を宣言した。かねてからエジプト軍に兵士を差し出していたから、それを回収すれば予算を掛けずに軍隊が創れる。

クシュ王国は少しずつエジプトの領内に進出を図ったが、エジプトの民衆は余り抵抗せず他人事のように傍観する者が多かった。別に愛国心に乏しかった訳では無く、クシュの国民が信仰する神様とエジプトの神様が一緒だったかららしい。

北に向かつて流れているナイル河は地図で見ると逆流しているような錯覚を覚える。川幅が広い割には流れが急であるから、北上するには船のエンジンが要らない。一方、南下する場合は帆を張って置けば風は南向きにしか吹かないから燃費が不要になる。ナイル河を航行する船には動力がサーピスされるので、中流域にある首都テーベに向けて南北から進撃してくるには都合が良かった。

エジプト王国に侵入した属国の軍勢は行く先々の主要都市をそれぞれ占領した。これに対して在来の第二十王朝、第二十一王朝は為す術が無く、第二十二王朝はリビア系、第二十三王朝はその分派、第二十四王朝もリビア人の首長が後から建てた王朝であり、第二十五王朝はエチオピア系である。

第二十一王朝の末期にあたる紀元前九百年代からのエジプトは「エジプト人によるエジプト人のためのエジプト人の政治」が全く行われなかった

ことになる。特に第二十二王朝を開いたシエシヨンク一世は、前王朝の傭兵司令官から「国王」を称した人物であるが、旧約聖書にも「シシャク」と偉そうな名前で記録されているという。誉められた訳では無く「エルサレムに攻め上り主の神殿と王宮の宝物を奪い去った」からである。この時のエジプト軍は戦車が千二百両、騎兵が六万、軍人軍属は数え切れないほどいたらしい。現代でも驚異的な軍事力である。

ユダヤ教徒から見れば「罰が当たって」、一般的に言えば「栄枯盛衰で」、最終的には第二十四王朝と第二十五王朝だけが残った。つまり、かつてエジプトに服従していたリビア代表とエチオピア代表が王国を築いて戦っていたのである。そしてエチオピア系王朝が勝っていた時代にアッシリア帝国が攻め込みエジプト全土を支配した。紀元前六七〇年代のことらしいから「その十年後に気絶していた神武天皇が建国した国が日本です」などと言つ話は恥ずかしくて国際社会に出せない。

攻め込んで見えたものの、アッシリアは周辺諸国から嫌がられていたからエジプトにばかりかまけてもらえない。そこで第二十四王朝の末裔に当るネコ一世という人物をアッシリアの代理主としてエジプトの統治を任せ、主力は引き揚げた。

ネコ一世の系統が第二十六王朝である。孫はネコ二世を名乗った。この王様は猫？にして置くには惜しい人物で、コペルニクスやガリレイらの地動説主張、さらにはバスコ・ダ・ガマやパソロミュー・ディアスらの冒険に二千年以上も先だつて喜望峰を回る航海を計画し、フェニキア人を実施させて地球が丸いことを確認している。

この立派な王様の系統も長くは続かなかった。

第二十六王朝は「エジプト復古主義」を強調して外国支配からの脱却を図ったのだが、貧困な下層階級の不満が高じて各地に暴動が起こった。王への反乱は軍の内部にも広がった。ネコ二世の孫、アプリエス王の代である。国王は軍の反乱を鎮圧するために重臣の「アマシス」を派遣した。

アマシスは貧しい庶民から身を起した人物のようで、国王の命により兵士の説得を続けているうちに兵士が「…あなたのほうが国王に相応しい」と言って反乱軍のリーダーにしたと言われる。

「…それでは…」と立場を変えたアマシスは第二十六王朝第五代の王として前任者アプリエスを攻撃することになった。新旧の国王は双方数万の軍勢を揃えたのだが、エジプト人庶民階層の兵士は大部分がアマシス軍に加わり、アプリエス軍の主力はギリシア人の傭兵であった。戦争は命がけだから、正社員もアルバイトも激しい互角の戦いを展開して、最後にアマシスの軍が勝った。

捕虜になった前国王は、日頃の圧政が祟って兵士たちの要求により処刑された。アマシスは敵だつたギリシア傭兵を再雇用して軍備を整え異国の侵略に備えた。新国王はアフメス一世として即位したのだが「家柄が良くない」と言つて服従しない国民もいた。日本では先祖や親の名声だけで政治家になつても、国民の役に立たない人物が多いが、どちらが良いものであろうか？

アフメス一世は、普段から足を洗つたり汚物を入れたりする金盥（かなだら）を集めて熔かし、これで神像を造らせた。この神像が街角に置かれると市民たちは熱心に拝み信仰した。アフメス王はエジプト人を集めて「神様の原材料」を暴露し「予はかつて貧民であつたが、今は国王で

ある。そなたたちは予を重んじ敬わねばならぬ」と言つて服従を誓わせた。一度は滅びかかつてアツシリア帝国に征服されたエジプト王国も、この風変わりな王様の時代に空前の繁栄をした。ヘロドトスは記録している。

アフメス一世の息子は、プサメティコス三世として第二十六王朝を継いだ。ところが、その一周年を迎える頃にエジプト王国は突如としてペルシア帝国のカンビュセス二世から攻撃を受ける。そこで父親のキュロス大王を遊牧騎馬民族の女王トミリスに殺され、その首に恥辱を加えられたのに、カンビュセス二世が「仇討（マツサゲタイ討伐）」をせず、全く関係の無いエジプト遠征を敢行したのはなぜであろうか？という…どうでも良い疑問が湧いてくるのである。

或る歴史書では「エジプト遠征は亡きキュロス大王の遺言」と述べているが、それでは葬式も済まないうちに遺産を請求するようなもので「そうですか…」とは言えない。別な史書ではキュロス大王が征服した世界一の金持ちリュディア王国とエジプト王国が軍事同盟を結んでいたから、と説明しているが、エジプトがリュディア救援に出かけた様子は無いから、ペルシア側が慌ててエジプトを攻める理由にはならない。

この難問？に対して、歴史の父・ヘロドトスは興味ある回答を残している。ただし、歴史学者の間では「ヘロドトスの物語好き」が言われており、伝えられたことが必ずしも正確ではない。表現を変えれば嘘が多い…らしいから保証は出来ないが日本の場合も「隠れた嘘」で構成されているようなものであるから眼を瞑って頂きたい。

主君を蹴落として王位に就いたにしても、強敵

## ギター文化館

# 2009 CONCERT SERIES

- |       |      |           |
|-------|------|-----------|
| 6月 7日 | 佐藤純一 | ギターリサイタル  |
| 6月28日 | 高橋竹童 | 津軽三味線のひびき |
| 7月12日 | 大萩康司 | ギターリサイタル  |
| 7月26日 | 大島 直 | ギターリサイタル  |
| 9月 6日 | 村治奏一 | ギターリサイタル  |

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の声（音）を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で…、大好きな雑木林に一摘みの土を分けていただき、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜 2 4 6 5

TEL0299-55-4411

アッシリアの占領支配からエジプトの国土を奪い返したのは第二十六王朝第五代の王アアフェス一世である。アッシリアはエジプトにもペルシアにも共通の敵であったから、一時期ではあるが両国が友好関係を結んでいた時期はあったろう。

何千年の歴史を誇るエジプト王国は、衰退したとは言っても文化的、社会的には他国よりも優れたものが存在した筈である。キュロス大王が元氣だった頃、戦争続きで埃が目に入ったのかどうか少し眼科通院が必要になった。健康保険が使えればペルシアの病院でも良かったのだが、エジプトはミイラを作る国だから医学も進んでいるであろうと考えて、「エジプト一番の眼科医」を派遣してくれるようにアアフェス一世宛てに要請をした。

アアフェス一世は、エジプト中の眼科医から一人を選抜してペルシア帝国へ行くように命じた。現代ならば飛行機で二時間もかからない距離だが駱駝のファーストクラスではかなり疲れる。然もアッシリアに攻め込まれた後だから、砂漠の向こうの国には恐怖心がある。選ばれた眼科医は王の命令に背く訳にはいかず泣く泣く妻子と別れてペルシアへ赴任した。心中に王への恨みを含んで…

キュロス大王の眼病は治つたらしいが、エジプトの眼科医は引き留められてエジプトへ帰る機会を失った。アアフェス一世に何とか恨みを晴らしたい眼科医は、ペルシアの皇帝がカンピュセス二世に代わつたのを機に「エジプト王アアフェス一世には美人の娘がいる」という話を聞かせた。

エジプト一番の眼科医が「美人」と言うのだから「目利き」に狂いはあるまい…カンピュセス二世は早速、アアフェス一世に美人の王女を妻にしたい(勿論、複数の妻の一人に)と申し入れた。

アアフェス一世には確かに娘は居るのだが、王女を差し出したとなるとエジプト王国がペルシア帝国の属国にされかねないし、第一に娘はごく普通の顔立ちで特別の美人ではない。その点でペルシアからクレームをつけられても困る…

困つたアアフェス一世は「替え玉作戦」を思いつき丁度、王宮内で保護していた少女が居たので、その娘を王女に仕立てることにした。その少女はアアフェスが追いつた第二十六王朝の四代目アプリエスの王女であった。少女の名はニテティスと言つたようで、偽の王女として差し出されるのだが、本来はこちらのほうが本物だから「似ててす…」と言わなくても、衣装を換え、化粧を施せば本当の本物に戻る。エジプト王アアフェス一世の王女として無事？にペルシア帝国へ嫁いだ。

このニテティスがペルシアの後宮に入つてからカンピュセス二世がエジプトの話を知っている時に「父親のアアフェス二世はどの様な人物か？」と質問をした。ニテティスは暫く返事を躊躇っていたが、思い切つたように「…実は王様はあの男に騙されています…」と、自分の素性を明かし、アアフェス一世がペルシア王を騙した経緯を明らかにした。カンピュセス二世は激怒してエジプト遠征を決めた…と言つのだが…

王の娘では無い者を王女として嫁がせる話はNHKのドラマでも良く使う手だしエジプトの場合偽物が本物だつた訳であるから、それによってカンピュセス二世が唐突にエジプト遠征を決めるものか疑問が残る。他にも幾つかの説はあるが、どれも聞いた後がスッキリとしない…では、本当のところは何が原因なのであるうか？

ここで持ち上がってくるのが、日本を始め世界

各地の宮廷で繰り返される兄弟相続争いである。カンピュセス二世にも序章で触れたように弟との確執があつた。父親のキュロス大王は遊牧騎馬民族の征討に向かう前に自らペルシア国内の統治に当り、長男のカンピュセスはバビロニアを任されていた。そして弟のバルディアは東方辺境(現在も探めているアフガニスタン、パキスタンからウズベキスタンなど)に置かれていたのである。

その東方辺境に反乱が起こつた。本来ならば当事者である弟の裁量で収める事件のだが、この反乱はバルディアの家臣たちが「王位継承者を自分たちの主君にするよう…」にキュロス大王に要求して騒いだ事件が発端だつたらしい。キュロスは自分から出かけて行かざるを得ず、昔の章で述べたように騎馬民族との戦鬪に巻き込まれる。

父親が戦死すると、カンピュセスは葬儀場の手配をするよりも前に自分の行く手を塞ぎそうな弟を暗殺することを考えた。バルディア自身も「国王には兄貴より自分のほうが向いている」と父親に言つたらしいのだが証拠は無い。何処の国でも継承権を持つ弟はそう思つらしい。

どういふ手段を講じたかは知らないが、暗殺は成功した。カンピュセスは誰憚ることなくペルシア帝国の皇帝になつた。ここで偉大な父親を越えるには帝国の領土を拡大するしかない。東方の危機は取り除いたから勢力を伸ばすのは西である。ゴキブリのようにチヨロチヨロしている北方騎馬民族は後でホイホイと退治すれば良い。

西暦紀元前五二五年、キュロス大王の遺志を継ぐため(と言つ口実で)「大アフリカ」アジア帝国」樹立と言つ空念仏がスローガンに掲げられ、カンピュセス二世は西方諸国征服のための進撃を開始

した。暗殺した弟の勢力圏だった東方には念のため一部を配置したので、兵力が少し足りなくなり、その分はギリシア人の傭兵で補充した。

昔の章でも述べたように、資源の少ないギリシアの国民は早くから「傭兵」としての市場を確保しており、大国がお得意先であった。現代のように怪しげな大国がやたらと存在していなかった当時はペルシアとエジプトが大国であり、どちらにもギリシアの傭兵が居た。冷静に考えるとギリシア人同士が戦う場合もあるのでは深刻な問題なのだが、当時のギリシア人は生活優先だった？

ペルシア軍は現在のイランからイラク、サウジアラビア、ヨルダンの諸国を通過して地中海東海岸に抜け、二千何百年経っても紛争が続くガザからシナイ半島（エジプト領）に侵入した。砂漠地帯はアラビア人の領域であるが、カンピュセスは予めアラブの王に使者を派遣して協力を要請していた。エジプトに抑えられていたアラブ人はペルシア軍に味方することになり、羊の皮袋に詰めた飲料水を供給した。一説では砂漠にタンクを置いて仮設水道を通したとも言われる。

エジプト第二十六王朝の王に就任して一年目のプサメティコス三世は、なぜペルシア軍が攻めてくるのか分らなかつたが、考えている暇はない。近隣に居た軍をまとめ、シナイ半島の付け根にあるペルシオンという田舎町に布陣して敵軍を邀撃した。ナイル河支流、現在はスエズ運河が通じている辺りの地中海沿岸と思われる。

エジプトには「雨」という言葉が無い…と聞いたことがある。プサメティコス三世が国王に就任して程なく、神の都テーベに霧雨が降り前代未聞の事件だと騒がれた。国王は天が自分に味方して

砂漠を抜けて来るペルシア兵が水不足で弱っているものと思い込んでいたのだがそれは逆だった。アラブ人から水を貰って元気なペルシア軍は怒涛の勢いで攻め込み、ギリシアの傭兵（エジプトに雇われた）が活躍してもエジプト軍は勝てずに、メンフィスまで退却させられた。

メンフィスはカイロの上流約二十五km地点にある要衝であり第二十六王朝は首都を置いていた。そこを護っていたのもギリシア人傭兵隊が主力の軍団だったが兵士たちは真剣に戦った。ところが何処の国でも賄賂で動くのは普段から偉そうにしている奴で、傭兵隊の隊長がペルシア側のギリシア傭兵隊幹部から賄賂を貰い、情報を流していたから話は早い。瞬間に首都も陥落し、第二十六王朝が支配するエジプト王国はペルシア帝国の支配下に置かれることになった。

先王のアアフェス一世は墓を暴かれミイラが辱めを受けたらしいが、プサメティコス三世は捕えられてペルシアへ護送されたと思われる。カンピュセス二世はエジプト王を兼ねることになった。エジプトにとっては迷惑な話なのだが、カンピュセス二世から後のペルシア王（五代）はエジプト第二十七王朝の王と言つことになった。

紀元前四〇四年に多分、前に述べたネコ一世の子孫と思われるアミュルタイオスと言う人物が苦勞をしてペルシア帝国の圧力を排除した。この時代のペルシアはギリシア遠征のついで国力が衰微していたから可能だったのかも知れない。

「猫」はエジプトが原産地らしいから何事もネコ頼みになる？アミュルタイオスは古都のサイステ第二十八王朝を興したのだが、外敵が排除された途端に土豪たちが暴れ出し、この王様は捕

えられて「王様になった」という罪で処刑された。「たった一人の王様」の悲しいお話である。

紀元前五二五年に戻って、二つの大国の王様になったカンピュセスは、ここでアッシリアのアッシュル・バニバル王のように占領地エジプトを誰かに管理させて自分は本国へ戻ればよかったのだが、妄想「大アフリカ」アジア帝国」に取り憑かれているから、さらに三方向の遠征を計画した。

まず貿易商（傭兵も請け負うが）ギリシアのライバルにまで押し上がった「カルタゴ」、次がユダヤと結んでいても信用が出来ない「アンモン」、そしてナイル河上流にいる第二十五王朝の残党とも言える「エチオピア」である。

カルタゴはチュニジアの首都チュニスの港湾地帯にあった王国で、後にローマ帝国に滅ぼされるのだがペルシア帝国に恨まれる筋は無い。しかしペルシアのほうには攻める理由があった。海軍力と海運力が欲しかったのである。元来は地中海の東岸、現在のレバノンに本拠を置いたフェニキア人の一派で、御家騒動により故郷に居られなくなった女王とその家来たちがチュニス海岸に流れ着き、現地のペルベル人酋長から土地を借りて細々と商売を始めたのが成功した国家である。

本家のほうは早々とペルシア帝国に屈伏していたのだがカルタゴは海軍力に自信があるから服従を拒否した。ペルシアはフェニキアに「カルタゴ征伐のための船」を出させようとしたのだが「祖先を同じくするフェニキアは攻められない」という理由で丁重に断られた。

遠征計画のうち、まずカルタゴ征伐は海軍でと考えていたカンピュセスの予定が狂った。エジプトに来ていたカンピュセスはフェニキアを罰する

ことも出来ず、仕方なく陸上からカルタゴを攻めるために大軍を差し向けた。エジプトからチュニジアへ行く途中にはリビア砂漠がある。

カンピュセスの故国ペルシアも砂漠の多い国ではあるが、砂漠の質？が良くない。ペルシア（イラン）の砂漠は、毒蛇や蠍（さそり）はいるが土混じりで灌漑農耕が可能である。リビア砂漠は模範的な砂漠であるから、精製された砂で出来ていて歩くのさえ容易ではない。そこへ何万とも知れぬ軍隊を送りこまれた。道に迷い砂に飲み込まれて兵士たちは全滅したと思われる。

アンモンに向かった兵士たちも伝えられる限りでは気の毒な話しか無い。このコースは砂漠だけでは無いが七日ほど行軍してオアシスの町に着きそこから次のオアシスに行く途中、昼食の最中に猛烈な砂嵐に襲われた。という話を攻められる側のアンモン人がしていた。ペルシア軍が引き返した様子はなく、アンモン人は元気だったらしいから攻めたほうが砂漠に消えたと考えられない。

残るエチオピア征伐のほうも、全滅とまではいなくても多数の犠牲者がペルシア軍に出たことは間違いない。それも戦闘による死者では無く糧食の不足による餓死者らしい。エチオピアという国は現代でも陸路が険しく、交通は空の便が主力である。飛行場と呼ぶには恥ずかしいような空地に何処からか飛行機が舞い降りてくる。二千何百年も前に大部隊が進撃して行っても補給が続かない。「餓死者が続出し、籤引きで戦友に食われた兵士も多かった」とヘロドトスは伝えているが、これを「嘘」だとは言えない地形なのである。

良く考えるとエチオピア人は奥地に退いて大人しくしていたのである。特に征伐を急ぐ理由もな

かった。実はカンピュセスはエチオピア遠征に先立ち、先遣隊を出して奥地を探らせた。彼らが目撃したのは金製品の多さであった。エチオピアには金が豊富で牢屋に入れられた罪人が金の鎖でつながれ、金の枷（かせ）をされていた。

この報告を聞いたカンピュセスは喜んだが遠征にはもう一つの「誤解」があった。先遣隊は「奥地に長命族が居て、平均寿命が百二十歳」という話も聞いてきたのである。金塊と長寿の秘薬を得られれば言うことはない。しかし本当は「長命族」

では無く、戦闘に長い弓を用いる「長弓族」だったとする。もしペルシア軍が飢えずに奥地まで攻め入ったとしても長い弓で遠方から強力な一斉射撃を浴びせられ被害を受けた筈である。

そういう事情を知らない総司令官のカンピュセスは当然ながら三方向遠征のうち、儲かりそうな「エチオピア長命コース」について行つた。しかし司令部がエジプトの砂漠地帯を通過し切れないうちにカルタゴとアンモンの悲報が齎され、またエチオピア行き本隊の惨状が伝えられたので仕方

## ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会は、この6月で4年目を迎えました。

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会月末（最終土曜日）に勉強会を行っております。

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063  
打田 昇三 0299-22-4400  
兼平 ちえこ 0299-26-7178  
伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

なく拠点とするメンフィスまで戻ってきた。

その頃、メンフィスの町は大騒ぎをしていた。「神を胎内に宿す」と言われる「聖なる牛」が出現したのである。出産に条件があり身体的特徴がある牛らしい。エジプト人は「神が自分たちの町に降臨した」と思い込んで盛大なお祭りを行っていたのである。そこへ三方向遠征が全て失敗し散々な目に遭ったカンピュセスが凱旋ではなく惨めな思いでコツソリと引き揚げて来た。

浮かれている民衆を見たカンピュセスは「ペルシア軍の失敗をエジプト人が喜んでいる」と勝手に思い込んで町の役人たちを集め尋問を行った。事の重大さに気付いた役人たちは必死で「長い年月に一度の奇跡が出現した」ことを説明したのだがカンピュセスは納得せず死罪を申し渡した。

次に聖なる牛と一緒に呼び出された祭司(神官)たちは広場で鞭打ちの刑に処され、今まで神様扱いをされていた牛は、その場に引き据えられた。カンピュセスは「本当に神を宿しているかどうか予が試してやる」と言って短剣で牛の腹を切り裂こうとしたのだが、牛が逃げたので脚が斬れた。

さらにカンピュセスは「祝いをして住民が居たら容赦なく殺せ」とペルシア兵に命じて町中を見回らせた。気の毒な牛は傷が悪化して死に、町の人はペルシア兵の眼を盗んで牛を葬った。

遙かな異国の地で多くの兵士を失い、罪の無いメンフィスの人々を罰し、毛色が変わっていただけの理由で牛を惨殺したカンピュセスは、暗澹たる前途の中でささやかな鬱憤を晴らしたつもりで久し振りに戦陣の垢を落とし寢床に入った。

その夜、熟睡しかけたカンピュセスは大声で叫びながら駆けこんで来た側近に叩き起こされた。

その側近は、ある筈が無い故国ペルシアでの重大な異変をカンピュセスに報告した。それはエジプト遠征に先立って後顧の憂いを断つために暗殺してきた弟のバルディアが「カンピュセスを廃嫡して王位に就いた」という奇妙な内容であった。

バルディア生存の報でカンピュセスが思い出したのは父親のキュロス大王の数奇な運命である。生後すぐに殺されるところを忠臣ハルパゴスに助けられた。バルディアにも誰かが付いていて救急救命処置を施したのかも知れない。ともかく急ぎペルシアへ戻って「本物の王様」は自分であることを証明しなければならない。

三方向遠征で多くの軍勢を失ったが、カンピュセスは残りの兵を二分して一隊にはエジプトを守らせ、一隊を引き連れて全速力でペルシアへ向かうことにした。武装する時間ももどかしく馬に乗るうとしたのだが、慌てているから帯剣の留めが緩んでいて鞘が抜け落ちた。抜き身の剣がカンピュセスの脚を刺し、重傷を負ったが非常時であるから応急処置をしただけで出発した。

嘔吐きと言われたヘロドトスは、メンフィスの町で「聖なる牛」の脚を斬った罰でカンピュセスも大怪我をし、そこが徐々に化膿して苦しみながら帰国途中で死んだ」と記録している。そのほかにあれこれとカンピュセスの悪事を書き連ねているのだが、古代オリエント学のほうでは、失政は「エジプトで神殿に税金を掛けて祭司(神官)から反感を買った」程度のこと」としている。

ヘロドトスを庇う訳では無いが、純粹に考えればペルシア人がエジプトを支配するだけでも悪行である。牛罰が当たったかどうかは別にしてもカンピュセスはペルシアへ戻れずに謎の死を遂げた。

暗殺、自殺、事故死、錯乱死などが言われる。

バルディアのほうはと言えば本物はやはり確実に暗殺されていて、カンピュセスが留守を頼んできた人物、それも当時としては一段、高い場所に居た祭司(神官団)の長が偽物のバルディアを担ぎ出して政権を奪ったのである。

何処の国でも神様に開けると怯むものだが人類の世界で一番大切なのは人類であると思う。キリスト教が商売上手で勢力を広げるまでは、ペルシア、エジプト、ギリシアがそれぞれの神様を創造し崇拜していた。それは自由だが、厄介なことに神に奉仕するヤカラが権力を握る例が多い。

古代ペルシアの宗教はゾロアスター(拜火)教だと考えたいが歴史学ではそうでもないらしい。名前は分からないが、特有の神様であつたらう。神官が特定部族の独占となり、神官族を形成し国王の側近中の側近として登用されると権力が増大する。この場合もカンピュセスがバルディアと暗黙の王位継承争いをしている際に神官族がカンピュセス支持に回った。その功績で神官の長・オロパステスは国王のエジプト遠征に伴って留守中のペルシア皇帝摂政権を与えられていた。

この神官族はキュロス大王により事実上、ペルシアの下に置かれたメディアの出身者であった。家臣として権力の座を極めると次の欲望は王位に向けられる。国王は長期間に亘って外国で戦っている。帰ってこなければ自分が王になれる。そう考えたオロパステスは、ふと自分の弟が、暗殺されたバルディアに少し似ていることに気づいた。オロパステスは摂政の権限でペルシアに残留していた軍隊を動かして戒厳令をひき、弟をバルディアに仕立てて政権の交代を布告したのである。

新しい国王は「高速道路無料化」「郵政民営化」や「王宮見学自由化」など庶民の暮らしに関係のない安直な政策を発表して民衆の懐柔に成功した。

偽ハルディアヤを新国王とする政権は本物の王がエジプトから戻れなかったこともあって八か月続いた。一般民衆も官僚たちも偽物には気付かなかつた。のではなく、官僚の中には？と感じた者も居ただけが黙っているしか無かつたのである。

一方、カンピュセスが負傷した時点で王の命令を受け先発した将校が居た。近衛騎兵師団の指揮官でカンピュセスの遠縁に当る（…）と言つても王位継承権は無い。ダリウス将軍である。僅かな騎兵を伴つて錯乱した国内を探るために隠密裏にペルシアへ入つた。既に偽政権が軍事力を握り全土を掌握している様子である。

ダリウスは王宮内に居た同族に連絡を取り、「信頼出来る軍人と会いたい」旨を申し入れた。折り返し使いの者がダリウスの隠れ家に来て同志六人と会う約束が出来た。ダリウスの父親は軍にも影響力を持つ「総督」を務めたことがあり、その時の部下などが同族と共にやつてきて七人によるクーデター計画が成立したのである。

実行の当日、ダリウスは階級に弱い兵士を利用して近衛騎兵師団長の制服で「国王への使者」と言つて堂々と表門から入り、何も知らない兵士たちをごく自然に服従させてしまった。他の六人も偽物の一味、つまり神官の一族に襲いかかつてこれを殺害しクーデターは成功した。

ダリウスはペルシアの国王に就任したが、王位継承権が無く正当な候補者が何人か居たために多くの反対があり各地に反乱も起きたようである。歴史学的にも正統性を疑問視する意見もありダリ

ウスこそが「ペルシア王権を奪つた者」らしい。しかし、ダリウスは専制君主ながら開明的と言われ産業の発展、灌漑農耕、貨幣制度確立、道路整備、歴史の記録など国力を充実させた。「不死身の一万騎（親衛隊騎馬軍）」に護られたこの王の時代にペルシアは周辺諸国を征圧して世界帝国になりダリウスは「諸王の王」を称した。

## ふるさと風の文庫

### 新刊

- ◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の  
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」（才媛の時代）（1000円）  
◎菅原茂美第二作 「遙かなる旅路」（2） （定価：500円）

打田昇三：ふるさと「風にたずねて」（I・II/III・IV/V・VI）  
（二冊組：1000円）

菅原茂美第一作「遙かなる旅路」（1） （定価：500円）

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと  
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成！！  
ふるさと「風のことば」（定価500円）

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

- 兼平ちえこ 「風邪に押されて」（定価500円）  
小林 幸枝 「風に舞う」（定価500円）  
白井 啓治「移ろう風の中に」（二冊組：800円）  
近藤治平「風に吹かれて」（二冊組：800円）

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館：0299-46-2457

・いしおか補聴器：0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡 13979-2（白井方）  
電話 0299-24-2063

## 別寄

自 　　から気付くこと

オカリナアートJOY 野口喜広

「故郷（ふるさと）」は遠くにおいて思うもの」とはよく言ったもので、遠く離れた故郷に思いを馳せると、なつかしさと共にセピア色の美しい風景が目に見えられます。

私の故郷は、埼玉県旧大宮市日遊町（現在はさいたま市北区）です。比較的街の郊外にあり私の子供の頃は鴨川（荒川の支流）という川の両側には田園が広がり、その田んぼに沿って畑や林が連なり自然がまだまだたくさん残っていました。

小学校に上がる前までは兼業農家で田んぼも畑も営んでいましたので、その周りでホタルや小鮒やカブトムシなどを夢中で捕まえて遊んでいたものです。それが今では、その風景は見る影もなく都市化が進み、田んぼや林はマンションや駐車場、ショッピングセンターに変わってしまいました。

そんなさなか、今から四年前、豊かな自然の中で人間らしく暮らしていきたいと思い、たまたま演奏の仕事で知るきっかけとなった場所、茨城県旧玉造町浜（現行方市）に引っ越してきました。現在は丘陵の上から霞ヶ浦を望める場所に工房を構え、オカリナを製作したり、教室を開いたり、曲を作ったりして生活しています。

朝はつぐいすの声で目覚め、昼は木漏れ日を浴びながら風のざわめきを身体で感じ、夜はかえるの鳴き声で眠りにつく生活です。毎日、自然につつまれた暮らしに、お金では変えられない豊かさを感じています。また食材は山菜を採ったり、家庭菜園をやっている近所の方からいただいたりし

て交流を深めています。

この地は、いにしえの書である常陸国風土記にも書かれているように、海の幸、山の幸に恵まれた常世の国なのです。この自然豊かな土地に住み、物の価値や本当の幸せについて改めて考えさせられました。世の中は近代に入りたった二百年足らずで幸せの価値判断が変わってしまいました。

地球に山積みする多くの問題を解決するにはまず自然の中に自分の身を置き、ゆっくりと考える必要があるのではないのでしょうか。そうすることにより人間が自然の中の一部であることに気付くのです。

私は、この茨城から音楽を通じ、土笛（オカリナ）で全国に向けてメッセージを発信できたら...と思っています。

最後に私のオリジナル曲「棚田・生命はめぐる」の詞をご紹介します。この曲は、先月五月二十四日にIBSラジオ（茨城放送）にて歌手佐川はじめさんに歌われました。

田・生 はめぐる 野口喜広

一、棚田に春の風 一面れんげそ  
土笛吹いた田に もう一度帰りたい  
広がる棚田に 笛こだま帰るよ  
父と母の棚田に帰りたい

二、棚田に夏の風 一面水鏡  
祭笛吹いた田に もう一度帰りたい  
広がる棚田に 笛こだま帰るよ  
父と母の棚田に帰りたい

三、棚田に秋の風 一面金の波

草笛吹いた田に もう一度帰りたい  
広がる棚田に 笛こだま帰るよ  
父と母の棚田に帰りたい

四、棚田に冬の風 一面銀世界

風笛吹いた田に もう一度帰りたい  
広がる棚田に 笛こだま帰るよ  
父と母の棚田に帰りたい

おらせ

七月十八日（土）、十九日（日）、二十日（月）  
行方市井上 連 の里山の「山百合まつり」にて、  
オカリナ演奏を行います。 ひお び下さい。

### 編集後記

この号からは四年目に入ります。改めて振り返ると三年間というのは大変な長さであるとしみじみと実感が湧いてきます。  
自分達を一番誉めてあげたい事は、一人の脱落者なく毎月原稿を書いてきた事です。これは大いに自慢してよい事だろうと思います。  
今は自分の年齢を数えながら、次の五年のゴールまで頑張っていかなばと思っています。

編集事務局 〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

（白井啓治方）

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ギター文化館発：ことば座第14回定期公演

常世の国の恋物語百：第21話

# 小町艶麗なる心歌

6月21日（日曜日）開演午後2時

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に

（古今集）

絶世の美女と称せられ、日本各地に伝説を持つ小野小町。この常世の国にも数多くの伝説を残し、墓も残されている。旧八郷町小野越の北向観音には、悪性の皮膚病に罹った小町が菩薩様と霊石の疣神に祈りをささげたところたちどころに治ったという伝説が残されてある。この地の小野越の名は小野小町が峠を越えたことから名付けられたという。

今回は、古今集に収められている小町の歌14首の朗読舞を軸に常世の恋風をお届けいたします。

脚本：演出 白井啓治 出演（朗 読）しらみひろぢ

美術（背景画）兼平ちえこ （舞 技）小林 幸枝

（装 美）小林 一男

入場料 3,000 円 （前売券 2,500 円）

※前売券は、ギター文化館 0299-46-2457 いしおか補聴器 0299-24-3881 で取り扱っております。

ことば座

〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35

TEL 0299-24-2063 fax 0299-23-0150

## ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする教室

「風の塾」を開いています。（各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円）

◎絵と一行文教室（講師：兼平ちえこ 白井啓治）

◎詩を手話で舞う「朗読舞教室」（講師：小林幸枝 白井啓治）

◎エッセイ教室（講師：白井啓治）

◎朗読教室（講師：白井啓治）

入塾および教室の詳細は、下記「ことば座事務局」（担当：白井）  
電話 0299-24-2063 までお問い合わせください。